

# もう一つの旅行記

## 柳宗悦の朝鮮紀行をめぐって

### 一、近代日本とアジア大陸への旅

一九一〇年八月三十日の『東京朝日新聞』は、前日行われた韓国併合の関連記事一色に塗りつぶされていた。開いてすぐ右の第二面には「韓国併合の詔書」があり、反対側の第三面には、右に「大日本帝国の全版図」、左に「新版図朝鮮」の大きな地図が載っている。この「新版図朝鮮」を見つめていた石川啄木が、亡国の民を悼むために「地図の上朝鮮国にくるぐると墨を塗りつつ秋風を聴く」という歌を作ったことはよく知られている事実である。しかし、啄木のようなケースは稀であり、当時ほとんどの日本人が日韓併合を手放しで歓迎していたことは同じ日の第一面の広告が如実に物語っている。

朝鮮に行け、朝鮮に行け、朝鮮は最早外国に非ざる也、未拓の美田、未知の天産、至る処に埋もれたる国富は有意なる日本人諸君の来るを待てり、朝鮮は閉ざされたる寶庫也、今や此寶庫の富は諸君に提供せられて諸君の腕次第割取るに任す<sup>1)</sup>

このえげつない、品のない広告から当時の日本の雰囲気が推し測れるが、実は朝鮮への渡航を積極的に押し進めていたのは他でもない明治政府であった。

近代国家として生まれ変わって間もない日本は、一八九四年に大国、清に挑戦し勝利を収めた。いわゆる日清戦争である。清国から獲得した莫大な賠

償金は日本の資本主義を一段と発展させ、朝鮮半島は日本の大陸進出の一応の足場となった。この足場の確保を巡って日本とロシアが対立し、日本の勝利に終わったのがあの名高い日露戦争である。朝鮮への足場を固めた明治政府は、まず最初に若い学生に、新たに開拓した領土へ旅行することを盛んに奨励し、かつ支援した<sup>2)</sup>。その結果として、一九〇五年から一九二〇年の間に、アジア大陸を旅行する人が急増したばかりでなく、その体験をまとめた旅行記が多数顕われるようになった。その代表的なものを挙げると、次のようなものがある。

### 丁 貴連

葛城天華『朝鮮半島豪傑的旅行』（一九〇五）、『滿韓旅行記念号』（学  
習院輔仁会主催、一九〇七）、『滿韓巡遊船』（朝日新聞主催、一九〇六）、  
鳥居龍蔵『南滿紀行』（東京大学主催、一九〇五）、白鳥庫吉『朝鮮旅行  
談』（一九〇五）、山路愛山『韓山紀行』（一九〇五）、新渡戸稲造『枯死  
国朝鮮』（一九〇六）、徳富蘇峰『平壤より義州』（一九〇六）原田讓一  
『朝鮮行』（一九〇八）、夏目漱石『滿韓ところぐ』（一九〇九）、高浜  
虚子『朝鮮』（一九二二）、谷崎潤一郎『朝鮮雜感』（一九一九）、大町桂  
月『朝鮮遊記』（一九一九）、柳宗悦『彼の朝鮮行』（一九二〇）、喜田貞  
吉『庚鮮滿旅行日誌』（一九二二）、田山花袋『滿鮮の行案』（一九二三）

このリストからまず注目すべき点は、日本の学術界における錚々たるメン

バー、すなわち日本史の白鳥庫吉と喜田貞吉、人類学者の鳥居龍蔵、政治ジャーナリストであり民友社の代表的な歴史家の一人である徳富蘇峰、農業経済学者の新渡戸稲造らが、こぞって併合前の朝鮮を訪れ、旅行記を執筆していたことである。いったいなぜ彼らは併合前の朝鮮に旅立ったのだろうか。それはいうまでもなく後に植民地経営に必要な知識や貴重な情報を明治政府に提供するためであった<sup>33</sup>。つまり、すでに日本の一部に成りつつあった朝鮮を体系的に知る必要に迫られていた明治政府は、日本を代表する歴史学者、人類学者、政治家、経済学者、文学者、ジャーナリストなどを朝鮮に送り込み、植民地経営に必要な朝鮮の歴史、文化、社会、農業、経済、政治状況などを報告させた。そして、大陸旅行者たちによってもたらされた知識や情報を体系的に研究するために、南満州鉄道株式会社の東京支社に「満鮮歴史地理調査部」を設置し、また、東京帝国大学に植民地研究講座を開設して、植民地研究を本格的に行った。その結果、日本が西洋列強の仲間入りを果たすことができたことはよく知られている事実である。

ところが、問題はこういった学術界の中心メンバーが書いた旅行記によって、学術界の人はもちろん一般の人々もアジア、とりわけ朝鮮や朝鮮人に対して蔑視意識を抱くようになったことである。いったいなぜ日本人は、アジアに対して急に差別したり蔑視したりするようになったのだろうか。様々な理由があるだろうが、一つには一九〇〇年から一九一〇年までの間に朝鮮などのアジア大陸から帰ってきた学者、ジャーナリスト、政治家たちが書き残した旅行記に負うところが大きい。

たとえば、民友社の歴史家であり著名なジャーナリストである山路愛山は、一九〇四年に朝鮮の各地を旅行した後、「韓山紀行」という短い旅行記を記している。

僕の眼に映じたる韓人は実にわが奈良朝時代の復活なり。ただ韓人の生活は奈良朝生活にして、奈良朝の生活は精神ある韓人生活なるを感ずるのみ。韓人の労働者は身幹体力ともに邦人に勝る。すこぶるノン気至極なるものにして飯ゆればすなわち起って労働に従事し、わずかに一

日の口腹を肥やせばすなわち家に帰って眠らんことを思う。物を蓄うるの念もなく、自己の情欲を改良する希望もなく、ほとんど豚小屋にひとしき汚穢なる家に蟄居し、その固陋の風習を守りて少しも改むることを知らずという。僕ひとたび釜山の地を履んで実にただちに韓国経営の容易の業にあらざるを知るなり<sup>34</sup>。

ここに描かれた朝鮮及び朝鮮人のイメージは、ヴィクトリア朝の旅行者がアフリカを旅行したときのイメージと全く同じであることに驚かざるを得ない。つまり、山路の眼に映った朝鮮・朝鮮人のイメージは、実は十七、八世紀の西洋人がアフリカ人に対して感じていた「不潔」と「怠惰」そのものである<sup>35</sup>。山路にとって、朝鮮は日本の「奈良時代」に留まっている、いわゆる「発展」が止まった国家であり、国民は「不潔」と「怠惰」に慣れ、その程度は植民地経営を憂慮するほど深刻なものであった。

このような見方、すなわち「不潔」と「怠惰」のイメージで朝鮮や朝鮮人を認識しようとする考えは、当時の日本の学術界及び政界、文学界などにおいては、かなり一般的なものであった<sup>36</sup>。実は近代日本を代表する文豪、夏目漱石もその一人であった。

漱石は韓国併合直前の一九〇九年九月から十月にかけて中国東北部と朝鮮を旅行し、「満韓とくろぐ」という紀行文を著した。これは漱石の輝かしい文学業績の中のたった一つの汚点として、連載当初より批判の対象となった作品である。漱石は中国人を「チャン」と見下し、作品の至る所で中国人の「不潔」に対して不快感を露わにし、しまいには汚い中国人と、綺麗好きの日本人を強調し、「日本人に生れました故幸福だ」と言っている。この感覚は明らかに初めてアフリカやアジアに旅行したときに西洋人が抱いたイメージと重なっている。

しかし、ここで注意すべきことは、当時の日本には、漱石のような人でさえも中国人を「チャン」と呼んではばからないという雰囲気があったというところであろう。一九〇五年頃から新聞や雑誌、書籍などで本格的に報じられるようになった朝鮮及び朝鮮人に関する記事（主として旅行記）は、すで

に山路愛山の旅行記で見たように、朝鮮人の「不潔」と「怠惰」を強調するものばかりであった。これらの旅行記がアジア大陸へ旅立っていく一般の人々に読まれるようになり、「朝鮮人とは不潔で怠惰な民族である」というイメージが広まるようになったのである。もちろんこれらの旅行記の中にはアジア大陸を知る上で必要な情報や知識が含まれていたことも事実である。しかしながら、その大部分が汚い貧しい生活をしている朝鮮人と、対照的に「綺麗好き」な日本人の姿が強調されている。このような旅行記が日本における一般的な韓国のイメージを形作ってきたことは否定できない。言い換えれば、社会的に著名な人々の残した旅行記が、韓国や中国に対する否定的なイメージを助長し、それが国民的イメージを形成してきたといえよう。

ところで、同じ頃朝鮮や中国、満州を旅行した民芸家の柳宗悦はまったく異なる旅行記を著している。一九二〇年に執筆された「彼の朝鮮行」、一九三六年の「朝鮮の旅」（後、「朝鮮の風物」と改題）、一九三八年の「全羅紀行」には、他の日本人の旅行記に見られるような朝鮮人に対する蔑視描写もなければ、文明の程度を比較するような描写もない。そこには長い伝統と優れた文化をもつ朝鮮及び朝鮮民族への限らない敬愛と尊敬の気持ちが綴られている。夏目漱石や高浜虚子、谷崎潤一郎らの旅行記がいずれも不潔で、怠惰で、品のない朝鮮人や中国人に侮蔑の視線を投げ、挙げ句の果ては「日本人に生れました故幸福だ」等と言っているのに対して柳宗悦の旅行記にはそのような場面はまったくない。この差はいったい何によるものであろう。

本稿では、柳宗悦の二十一回に渡る朝鮮紀行を追いながら、彼が如何にして明治期の日本における一般的なアジア認識、朝鮮認識から脱却していったのかを考察したい。

## 二、西洋からの脱却と東洋への回帰の旅

一九一四年、李朝染付秋草文面取壺を手土産にもって我孫子の柳宗悦邸に一人の男が訪れた。柳が預かっていたロダンの彫刻を見るために朝鮮から帰国した浅川伯教<sup>7</sup>であった。柳はこの土産を側に置いていつも眺めていた。

眺めれば眺めるほどその美しい姿に心から惹きつけられていった。これが柳と朝鮮との「出会い」なのである。



李朝染付秋草文面取壺  
(日本民芸館 蔵)

朝鮮の焼き物への関心は、柳がまだ学習院高等科に在学している頃、東京神田の骨董品屋でたまたま見つけた李朝の染付牡丹文壺を購入したことがそもそものはじまりであったが、朝鮮の陶磁器への関心を一層加速させたのが、浅川伯教が手土産に持参した李朝の陶磁器であった。柳はその感動を次のように述べている。

自分にとって新しく見出された喜びの他の一つを茲に書き添えよう。

それは磁器に現はされた型状美 (Shape) だ。之は全く朝鮮の陶磁から暗示を得た新しい驚愕だ。嘗て何等の注意をも払はず且つ些細事と見做して寧ろ軽んじた陶磁等の型状が、自分が自然を見る大きな端緒になる

うとは思ひだにしなかった。「事物の型状は無限だ」と云ふ一個の命題が明瞭に自分に意識された時此の単純な真理は自分にとって新しい神秘になった。その冷な土器に、人間の温み、高貴、莊嚴を読み得ようとは昨日まで夢みだにしなかった。自分の知り得た範囲では此型状美に対する最も発達した感覚を持った民族は古朝鮮人だ。之に次ぐのは恐らく支那人だ。もとより殆ど凡ての未開民の製作が屢々暗示に豊かな象徴的型状美を示している事は事実だ<sup>80</sup>。

柳の美意識に新たにつけ加えることになった「形状美」は、実はそれまでまったく顧みることのなかった東洋、しかも評価の対象にすることすらなかった李朝の焼き物であった。柳にとって新たな発見、いや近代日本の芸術界における新たな発見となるこの美意識は、二年後、朝鮮を旅することによって、一挙に高まっていくが、この旅行に柳を誘ったのは、ほかでもない、我孫子の自宅に陶磁器を携えて訪ねてきた浅川伯教とその弟である巧<sup>81</sup>なのであった。

一九一六年八月、柳は朝鮮に出かけた。はじめての朝鮮旅行であった。彼の旅行手帳からはおよそ次のような日程を知ることが出来た。

八月十一日、釜山着

十三日、晋州

十九日、海印寺

三十日、慶洲

三十一日、仏国寺・石窟庵

九月一日、石窟庵

二日、石窟庵

十三日、京城、開城、新義州

十八日、北京

十月三日、北京発

十五日、我孫子着<sup>82</sup>

この旅の成果は大きかった。結論から言えば、それはそれまで西洋に向けていた柳の関心を東洋へ帰し、柳が朝鮮とその芸術に限りなく魅せられていく出発点となった旅だったからである。釜山港で柳を迎えた浅川伯教は、まず柳を、海印寺に連れていき、そこで十三世紀の高麗大蔵經の版木を見せた後、次に慶洲に連れていって、仏教美術の神髄である仏国寺と石窟庵を見せている。いわゆる朝鮮文化を代表するところに、始めて朝鮮の地に足を踏み入れた柳を案内したわけである。浅川兄弟のこの意図は、柳に「もう一つの朝鮮」、すなわち「停滞」と「他律」に代表される劣った国<sup>83</sup>としての朝鮮ではなく、長い伝統と優れた文化をもつ国という印象を与えるためであったことはおのずと推測できる。浅川兄弟の意図は的中し、朝鮮旅行から帰ってきた柳は、西洋の芸術ばかりを紹介してきた『白樺』の編集方針を変えたいと申し出た。その方針というのは、

此の旅行は期待よりも遙かに感銘が深かった。いつかそれらを記念するものを雑誌に書きたいと思っている。又特に古朝鮮の美術で吾々の驚嘆と注意とに値するものを写真と共に雑誌で紹介したいと思っている。

今まで吾々は凡て西洋の芸術をのみ紹介してきた、然し今後折々東洋の作品を新しい眼で紹介したいと思っている<sup>84</sup>。

というように、いわゆる西洋からの脱却と東洋への回帰であった。ちょうど創刊十周年目を迎えた『白樺』は、もっぱら近代ヨーロッパを見つめてきた従来の方針を変えて本格的に東洋の芸術を紹介しはじめた。一九一九年七月号には、日本の古美術を掲載し、翌年の一九二〇年一月号には、朝鮮古美術、すなわち新羅時代の金銅半跏思惟像、百濟時代の弥勒菩薩像、そして石窟庵の仏像など六枚の挿し絵を掲載した。そして、それらを掲載した理由を次のように述べている。

去年の七月、始めて「白樺」が東洋の絵から挿絵を選んだ時、その企てを喜んで下った方々は予期以上に多かった。(個人として私に好意あ

る手紙を下さつた方々に茲で厚く御礼の心をお伝へする。) 今度二度目の試みを果たす様になつたのを嬉しく思ふ。自分は朝鮮の彫刻からは等の挿絵を選んだ。(中略)

是等の作は実に朝鮮の名譽を語る永遠の傑作と思ふ。或批評家は支那の芸術に對比して朝鮮芸術の独立を疑う様であるが、然し之は美に対する洞察の無い批評であらう。よし深い歴史的關係がその間にあるにしても、余は却つて明確な差違が彼等の美の表現に於て存すると思ふ。支那の力強い形 Form の美は朝鮮に於て見ることは出来ぬ。然るに朝鮮の流れる如き線 Line の美は、只朝鮮人のみの所有である。恐らく此線の秘事を解き得ないなら、吾々は朝鮮の美に近づく事はできないであらう。余は日本人々が朝鮮芸術を理解する事がその国民の心に近づく最も深い道だと云ふ事を知つてほしく思ふ。

鶴見俊介氏は、柳のこの短い文章は、「白樺」の文学運動にとつての一つの転機があるばかりでなく、日本の近代思想にとつての一つの転機があり、更に日本文化の主流となつてきた考え方に対する転機がある、とその意義を高く評価している<sup>90</sup>。というのは、当時日本の知識人達はもっぱら西洋を見つめ、東洋の伝統として中国文化しか見てこなかった。そのために朝鮮文化はかえりみられることのない存在となつていたからである。このような朝鮮蔑視の時代に、柳宗悦は朝鮮を重んじなければならぬと主張したのである。日露戦争後、文学者、歴史家、人類学者、ジャーナリストなど様々な分野の錚々たるメンバーが朝鮮を訪れ、朝鮮の文化、文学、歴史、人類学を調査・研究し、一時期日本では朝鮮ブームが起きるほど、朝鮮研究が盛んだった<sup>91</sup>。しかし、彼らの眼に映つた朝鮮はもはや顧みることのない劣った地であった。例えば、歴史学者の喜田貞吉は一九二〇年、約一ヶ月間、朝鮮、満州を旅行し、「庚申鮮満日誌」(『民族歴史』助間一号、一九二二年七月)を記している。それによると、喜田は朝鮮の文化などにはまったく興味を示さず、朝鮮人の生活様式にばかり関心を持って朝鮮を見物している。釜山に上陸した喜田は、たくさんの朝鮮人が地べたに腰をおろしてぼんやりしているのを見て

鎌倉時代の絵巻物にある光景だと感じている。また、ソウルの近辺では、「土幕民」といって、川の堤防に横穴を空けて入り口にはむしろをたらし住んでいる人たちを見て、「日本の古代の土蜘蛛を思い出す。それがまだ朝鮮に存在する」という。さらには、蒸し風呂を見て日本では江戸時代以後蒸し風呂が廃れて今の風呂、湯屋になったが、それに対して「朝鮮には今でも蒸し風呂がある」という。ほかに、朝鮮人の米の消費量が日本の三分の一位だということを聞いて、「やはり朝鮮は古い国だ、日本も江戸時代以前は米の消費量が少なかった」といっている。

喜田の旅行記の特徴は、旅行中に目にする朝鮮人の生活態度を悉く日本人の生活風習と比較し、朝鮮は日本の平安時代止まりだと書き記しているところである。無論これは喜田に限ったことではない。当時アジア大陸を旅した日本人が書き残した旅行記のほとんどが、いわゆる「劣ったアジアに対する優れた日本」を強調していることは、すでに一章で見てきたとおりである。

柳宗悦の東洋への回帰、ないしは朝鮮美術への開眼が、このような朝鮮蔑視という異常な雰囲気のある時代に行われていたという事実を、私たちは決して見落としてはならないであろう。

### 三、三・一運動との出会い

最初の旅行から三年後の一九一九年三月一日、朝鮮で三・一独立運動<sup>92</sup>が起こった。日本は朝鮮に軍隊を派遣し、武力弾圧を行った。柳は、三年前の朝鮮旅行の思い出が思い起こされ、いても立ってもいられた。しかし、この悲劇的事件は当時の日本人の思考と行動に影響を与えることはまずなかった。朝鮮問題をよく知っている知識人はもちろん、意識ある学者、文人、宗教人、甚だしくは社会主義者でさえも沈黙を守り抜いた。柳は失望した。そして、沈黙を破り、一九一九年五月二〇日から二四日までの四日間には『読売新聞』に「朝鮮人を想ふ」という一文を掲載した。三・一運動という歴史的出来事との「出会い」を柳は次のように語った。

自分は朝鮮に就いて充分な予備知識を持つてゐるわけではない。僅かに所有する根拠があれば、それは凡そ一ヶ月の間朝鮮の各地を巡歴した事と、旅立つ前二三の朝鮮史を繙いた事と、豫ねてからその国の芸術に厚い欽慕の情を持つてゐる此の三つの事実だけである。

併し是等は僅かな根拠に過ぎぬかも知れぬが、今もだし難い情が余に此一編を書かせたのである。余は以前から朝鮮に対する余の心を披瀝したい希ひがあつたが、今度不孝な出来事が起つた為、遂にその期が来て余にこの筆を執らせたのである。

余は今度の出来事に就いて少なからず心を引かれている。特に日本の識者が如何なる態度で、如何なる考を述べるかを注意深く見守つてゐた。併しその結果朝鮮に就いて経験あり知識ある人々の思想が殆ど何等の賢さもなく深みもなく又温かみもないのを知つて、余は朝鮮人の為に屢々涙ぐんだ。

この短い文章が近代日本の知識人社会に投げかけた意味は甚だ大きい。鶴見俊輔氏によれば、当時三・一運動を正当に評価し、その武力鎮圧を批判した日本の知識人は、川崎克、吉野作造、石橋湛山、宮崎滔天、柏木田義、柳宗悦のわずか六人にすぎなかつたという。柳をのぞく他の五人がすでに政治に対していろいろと発言していたのに対して、柳はまったくそのような経験を持ってゐなかつた。にもかかわらず、柳は日本の知識人たちが思いもよらなかつた政府批判を行ったのである。もちろん柳は危険人物と目され、官憲に尾行される生活を余儀なくされるばかりでなく、厳しい検閲をうけることとなるが、柳は一向に気にしなかつた。むしろ、自分のところに寄せられたたたくさんの共感の手紙に大いに鼓舞され、逆に「もう一つの朝鮮」を日本人に知らせたいと強く思うようになった。

社会学者、有賀喜左衛門は、『読売新聞』に掲載された「朝鮮人を想ふ」を読むやいなや柳を訪ねた一人である。当時東京大学一年生であつた有賀は、柳に出会うことによって朝鮮とその芸術に急速に惹かれていき、やがて卒論に朝鮮美術を取り上げるにいたる。それは、主任教授の強く反対するところ

であつたが、彼はそれを機会に、朝鮮の各地を歩くことになった。そして、朝鮮人の生活に触れるなかで、有賀はやがて民族学や民俗学に関心をもち、のちに柳田国男に師事し、また渋沢敬三の教えを受けることになる。そして有賀は、柳、柳田、渋沢らによって、日本を見る新しい視点を発見していくのだが、その出発点が、柳宗悦の「朝鮮人を想ふ」であつたと阿満利磨は指摘している。

日韓併合以来、日本人の中に朝鮮に対する差別意識が急速にひろがり、朝鮮及び朝鮮問題はほとんどの日本人に無視されていた。「朝鮮人を想ふ」は、そのような時代に対する柳の抵抗であり、有賀はその抵抗の心を理解した数少ない日本人のなかの一人であつた。

一方、このような柳の精神は、朝鮮人との出会いをももたらした。「朝鮮人を想ふ」が発表されたあと、柳のところには朝鮮人留学生が訪れるようになり、柳と朝鮮人との間に交流が始まつた。我孫子の柳邸には朝鮮人留学生が訪ねてくるようになり、当時早稲田大学生であつた南宮壁は、柳邸にしばらく滞在しながら柳の朝鮮行きを支援した。また、近代韓国文学におけるリアリズム文学の完成者と知られる廉想渉は、「朝鮮人を想ふ」を朝鮮語に翻訳して創刊されたばかりの『東亜日報』（一九二〇年四月十二日から十八日）に連載し、多くの朝鮮人に「もう一つの日本」及び日本人を知らしめた。朝鮮人留学生との交流は柳を朝鮮へとより深く導き、柳は二回目の朝鮮行を計画した。このときの日程は、およそ次の通りである。

五月一日、出発

二日、釜山着

三日、京城着。羅惠錫・許肅英らの盛大な出迎へと文学団体廃墟社主催の歓迎会。

四日、東亜日報社主催の音楽会。聴衆は一二〇〇名

五日、京城基督教青年会主催の音楽会

七日、京城基督教青年会主催の音楽会

十一日、楽友会主催の音楽会

十三日、元独立協会会長・尹致昊、「万歳弁護士」金雨英らによる歓迎会  
十五日、文友会主催講演会、廢墟社主催の音楽会

十七日、兼子、京城発

二一日、講演会

二二日、宗悦、京城発

日程表からも分かるように、一回目の旅行が朝鮮の文化を知るための遺跡地巡りであったならば、二回目の旅行は、民衆の中に入り込んで朝鮮人との交流を試みる旅であった。この旅行後執筆した「彼の朝鮮行」〔改造〕一九二〇年〕という旅行記によれば、柳夫妻はこの旅行中、四度に渡る丁寧な歓迎会を受け、当初三回予定の音楽会を七回、講演会を四回開催している。三・一運動の弾圧の余韻の残る時期であったにもかかわらず、このような盛大な歓迎を受けたのには、何よりも「朝鮮人を想ふ」や「朝鮮の友に贈る書」(一九二二)が『東亜日報』に翻訳・掲載され、多くの朝鮮人の目に触れたこともあろうが、それよりもまして、この旅行に掛けた柳夫妻の志、すなわち朝鮮の人々との交流を通して朝鮮や朝鮮人を理解しようとした姿勢が通じたからにはほかならない。

当時日本人にとって朝鮮という地は、生活が苦しい農民や商人達が、一攫千金をねらって、あるいはマンネリズムに陥った知識人が何か新しい生活を求めるために、または、学者や官僚が植民地経営を研究するために行くところであった。つまり、自分たちの生活や研究のための、あるいは退屈を紛らすために行くところであって、朝鮮や朝鮮の文化、歴史、さらにはそれらを創った人と交流するために行く場所ではなかった。

しかし、柳は違っていた。「彼の朝鮮行」によると、柳は、歓迎会や講演会に来てくれた朝鮮の人々との接触を通じて彼等が求めているものを知ることができた。また、京城、すなわちソウルの町を歩くことによって、在朝日本人の朝鮮人への蛮行とソウルの古い町並みが同化政策の荒波に晒されているという事実を知った。とりわけ、朝鮮総督府の手によって朝鮮王朝の宮殿である景福宮の敷地内に朝鮮総督府の新しい庁舎として巨大な西洋建築が立

てられているところを目撃したときは、それらの建築がいずれは宮殿の破壊につながる前兆であることを見抜くこともできた。また柳は、滞在中の間、朝鮮の様々な芸術を見ることによって、「朝鮮芸術史を書きたい」、「朝鮮民族美術館を設置したい」と希望するようになった。柳の朝鮮行が同時代の日本人と如何に異なっていたのかを、この旅行記はいみじくも物語っている。

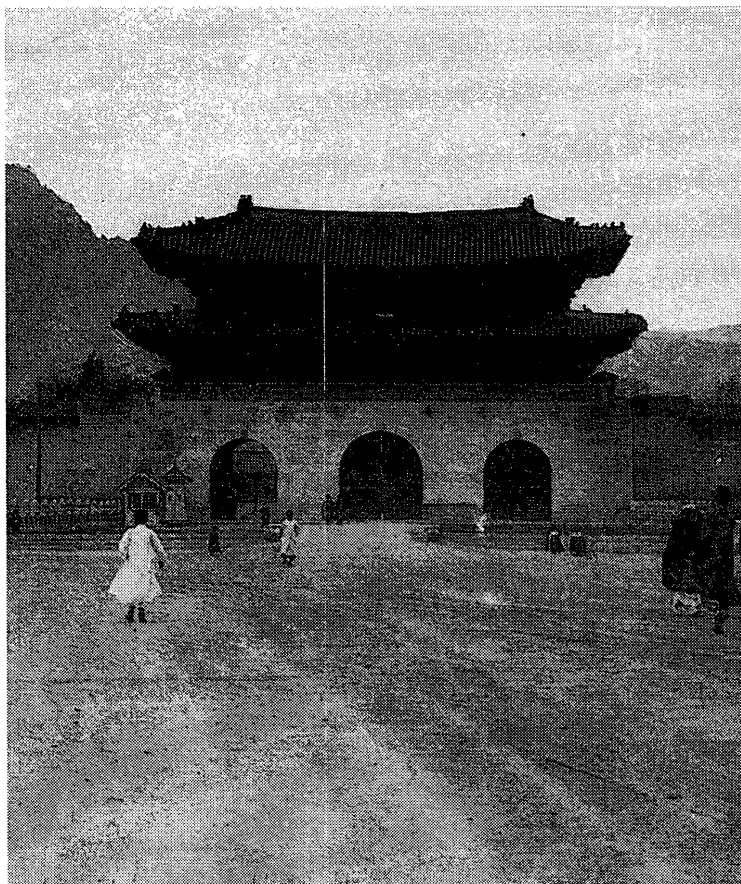
#### 四、柳の「遺産」——光化門・朝鮮民族美術館

三・一運動という歴史的事件との出会いは、柳を朝鮮と朝鮮問題、さらには朝鮮の芸術に深く関わらせた。そして、それはすなわち日本の帝国主義に対する飽くことのない抵抗の始まりでもあった。というのは、この第二回目の旅行中、柳はある情報を耳にする。それは朝鮮総督府が朝鮮王朝の宮殿・景福宮の境内に新しい庁舎を建築するにあたって、その前をふさいでいる光化門を撤去するという情報であった。そして、実際に景福宮をたずねてみると、

然るに何事であるか、自然を深く考慮し、その配置に周到の注意を払い、民力の限りをさえ尽して築造されたその計画が、まさに滅亡の嘆きを見ようとしているのである。今日光化門と勤政殿との間に膨大な西洋建築が総督府の手によって建ちつつある。然も位置はやや西側に片寄って旧事の秩序を少しでも、省みる事がない。さしも大きな正殿も今日は門を通して見る事さえ出来ぬ。否、今日では既に勤政殿の全景を正面から見る如何なる位置もなくなったのである。何たる無謀の計画で之があらう。やがて正殿を壊し、光化門を捨てる前兆でないか誰が保証し得よう。

というように、すでに景福宮と勤政殿の間には西洋建築が建てられつつあった。この場面を目の当たりにしたときの柳の驚愕ぶりは、想像を絶するものだった。柳は、朝鮮総督府の無謀な計画が、やがて景福宮の正門である光化門という歴史的な建築物を壊すことになるだろうと予測した。





移転される前の光化門

それから、二年後の一九三二年、柳の心配はとうとう現実となった。いても立ってもいられなくなった柳は、直ちに筆をとって、「失はれんとする一朝鮮建築の為に」(『改造』一九三二年九月)という歴史的な一文を書き上げて世論に訴えた。

光化門よ、光化門よ、お前の命がもう旦夕に迫ろうとしている。お前が嘗てこの世にいたといふ記憶が、冷たい忘却の中に葬り去られようとしている。どうしたらいいのであるか。私は想ひ惑っている。酷い槌や無情な槌がお前の軀を少しづつ破戒し始める日はもう遠くないのだ。このことを考へて胸を痛めている人は多いにちがひない。だけれども誰もお前を救ける事は出来ないのだ。不幸にも救け得る人はお前の事を悲しんでいる人ではないのだ。

まだ世は矛盾時代だ。門の前に佇んで仰ぎ見る時、誰もその威力ある美を否み得るものはないのだ。併し今お前を死から救はうとする者は反逆の罪に問われるのだ。お前を熟知している者は発言の自由を得ないのだ。

この文章は直ちに威力を発揮した。さっそく英語と朝鮮語の訳<sup>9</sup>があらわれて世論が動き出され、光化門は破壊の難を免れて別の場所に移転されるに至った。旅の途中、ふと聞いた何気ない情報に、柳は強い関心を示した。その結果、朝鮮王朝の貴重な遺産が「無益」な破壊から救われたのである。普通だったら聞き逃すはずの旅先の情報に、柳がこれほどまでに敏感に反応したのは、京城の町を自らの足で歩くことによって朝鮮民族とその民族が生み出した芸術品が、朝鮮総督府の同化政策の荒波に晒されているという事実を知ったからにはほかならない。なかでも、同化政策という名の下で「世界芸術に独特な位置」を占める朝鮮の固有の芸術と、その芸術を創造した民族の獨創性が失われつつある現実には、柳は耐え難い怒りと深い悲しみを感じた。柳によれば、一国の芸術とその芸術を生み出した心を破壊し抑圧する行為は、「罪悪中の罪悪」であった。しかし、日本はその「罪悪中の罪悪」を行っていたのである。朝鮮総督府の光化門の破壊計画はまさにその典型であった。柳はこれ以上日本の「罪悪」を放置することができなかった。そして、「無益の散逸」の危機にさらされている朝鮮の芸術品を保存することによって、日本の同化政策の愚かさを知らしめようと決心したのである。この決意は固く、柳は旅行から帰るやいなや、「朝鮮民族美術館設立趣意書」(一九二〇年十二月)を書き、そのなかで、

私は先づここに民族芸術 Folk Artとしての朝鮮の味ひのにじみ出た作品を蒐集しようと思ふ。如何なる意味に於ても、私はこの美術館に於て、人々に朝鮮の美を伝えたい。さうしてそこに現はれる民族の人情を目前に呼び起したい。そのみならず、私は之が消えようとする民族芸術の、消えない持続と新たな復活との動因になる事を希ふ。数の少ない朝鮮の作品は、恐らくあと十年の後には散逸の悲しみを見るであらう。



今朝鮮の人々は目前の出来事の為に、それ等のものを顧みる余裕を持たない。然し今のままでおけば、いつかそれ等の作品に対する悲しい追憶が来るにちがひない。私はその不幸は散逸を防止する為にも、かかる企てが為されねばならぬ仕事であると思ふ。之を急がないならば只に機は失はれるのみならず、民族の固有の美すら、遂に過去のものとして葬られるにちがひない。

と訴えた。つまり、柳が第二回目の旅行の際に、ソウルに朝鮮民族美術館を設立したいと思ったのは、「無益の散逸」の危機にさらされている朝鮮の作品を集め、それを美術館に展示することによって、日本人や外国人に朝鮮の美を伝え、「そこに現れる民族の人情を目前に呼び起こす」と同時に、朝鮮の人々が新たな芸術品を作り出すきっかけとなる場を提供するためであった。

こうした柳の姿勢は、同化政策を推進する朝鮮総督府にとっては決して歓迎すべきものではなかった。朝鮮総督府は「朝鮮民族美術館」の館名から「民族」の二字を取り除こうとした。しかし、柳は頑としてこれをはねつけ「朝鮮民族」という四文字を押し通し、一九二四年四月、景福宮のなかの緝敬堂に「朝鮮民族美術館」を開館させた。手作りの小さな施設であったが、この朝鮮民族美術館は、光化門とともに、柳の第二回目の朝鮮旅行が、朝鮮民族に残した「遺産」であると、幼方直吉氏は指摘している。

## 五、方法としての旅 — 展覧会・音楽会・講演会

柳は、一九一六年にはじめて朝鮮に足を踏み入れて以来、一生のうちに二十一回朝鮮を訪れている。当時朝鮮を訪れた人々の旅といえ、せいぜい一回か二回の単発の旅であったのに対して、柳のこの回数は驚異的な数字である。いったい何が柳を朝鮮へと駆り立てたのか。朝鮮の美しい陶磁器と芸術、朝鮮の人々の情が彼を朝鮮へと導いたことはいうまでもない。しかし、彼を朝鮮に惹きつけたもう一つの理由は、三・一運動と関東大震災の直後の

朝鮮の人々を慰めたいという気持ちだった。彼はそのために朝鮮で音楽会や講演会を開いたり、あるいは朝鮮民族の作り出した芸術品を展示する美術館を開館したり、さらには西洋や日本、朝鮮の芸術を展覧したりした。つまり、柳にとって朝鮮旅行は、芸術を通じて日本と朝鮮が互いを理解し、知り合い、わかり合い、互いの国の芸術を日本人はもちろん、朝鮮人に知らせるための方法としての旅であった。

既に見てきたように、朝鮮総督府の光化門破壊計画を批判した「失はれんとする一朝鮮建築のために」は、内外から多くの賛同を得て朝鮮総督府に破壊計画を放棄・移転させたという点において、「公的な役割」を十分に果たした優れた評論である。柳にはこのように著述活動を通じて日本帝国主義への抵抗を示すほか、芸術活動、すなわち講演会や音楽会、展覧会の開催、及び美術館の設立などを通じて日本政府の同化政策に抵抗した、実践的な行動人としてのもう一つの顔がある。そこで、柳が二十一回の旅のなかでどのような展覧会や音楽会、講演会を行ったかを見てみたい。

### 二回目、音楽会七回

講演会四回 「宗教と芸術に依拠せよ」「朝鮮に來た感想」

### 三回目、講演会一回

### 四回目、音楽会七回

講演会七回 「朝鮮民族と芸術」

「宗教の世界」

「朝鮮人為對する実感」

### 六回目、西欧名画複製展覧会

ウィリアム・ブレイク展覧会

講演会二回 「ブレイクの絵画」

「ブレイクの詩歌」

### 七回目、中世基督教芸術展覧会

李朝陶磁器展示会

講演会「中世における基督教芸術に就て」「古代陶磁について」

## 講演会「宗教に就て」「罪意識に就て」

「死と御救とに就て」

「絵画の変遷に就て」

九回目、朝鮮民族美術館開館

十回目、木喰佛写真展覧会

発掘陶片展覧会

音樂會二回

十二回目、李朝美術展覽会

十三回目、李朝美術展覽会

音楽会及び講演会「工芸の美」

十四回目、李朝陶磁器展覽會

## 講演会「焼物への見方」

十七回目、朝鮮民族美術館展覽會

講演会・音楽会 ④

一覽表からも分かるように、柳はほとんど毎回の旅行で、何らかの形で講演会や展覧会、音楽会を行っている。しかも、それらの展覧会や音楽会、講演会のなかには韓国芸術史に記録される重要なものが多く含まれている。例えば、第二回目の旅行中に行われた兼子夫人の音楽会は、ヨーロッパ音楽の朝鮮への紹介、すなわち朝鮮に西欧音楽が伝来して以来最初の独唱会として朝鮮音楽史に記録されるものである<sup>98</sup>。第六回目の旅行中に行った「西欧名画複製展覧会」は、朝鮮に紹介された最初の西欧絵画展であるという点において、韓国美術史に記録されるものである<sup>99</sup>。また、ブレークの展覧会も朝鮮における最初のブレークの紹介となったことはいうまでもない。第七回目の旅行の際に行なった「中世基督教芸術展覧会」もやはり朝鮮における最初の展覧会である。つまり、柳は韓国における近代西洋音楽及び美術の移入・紹介に重要な役割を果たした人物であったわけである。だが、その評価はと

ところで、一覽表からも分かるように、柳は近代西洋芸術の紹介が一段落すると、朝鮮芸術の紹介へと転じる。第七回目の旅行から始まった朝鮮美術展は、二年後の「朝鮮民族美術館」の開館をピークに、一九三二年まで続いている。これらの一連の展覧会は、それまで評価の対象にすることすらなかった朝鮮美術の価値を高め、朝鮮の人々に朝鮮美術の存在を知らせる契機となった。柳の意図は的中し、朝鮮の人々は柳の行った展覧会に強い関心を示し、多くの人がそこに駆けつけた。第七回目の旅行中に開催された「李朝陶磁器展覧会」は、朝鮮人が自国の芸術品に自信を持つ一つの契機となった展覧会であった。三日間に渡って開催されたこの展覧会には約千二百人が入場したが、入場者の三分の一が朝鮮人であった。これは当時、世間でまったく認められていないばかりか、むしろ軽蔑されていた李朝の焼き物や工芸品、芸術品を、ようやく朝鮮の人々が認めるようになった何よりの証拠である。

『東亞日報』1920年4月17日に掲載された広告

らば、音楽会は政治的に自尊心を失っていた朝鮮の人々に未来への希望を見

出す契機となった。というのも、柳兼子が朝鮮で音楽会を開いたのは、三・一独立運動に対する朝鮮総督府の武力鎮圧が行った直後である。日本人の朝鮮人に対する警戒心が頂点に達した時期であったにもかかわらず、音楽会が実行され、しかも大成功裏に終わったのには、この独唱会が朝鮮で開かれた最初の西洋音楽会であったということもさることながら、三・一運動の失敗に打ちのめされていた朝鮮の人々に現状打開の突発口を開く契機を提供したからである<sup>80</sup>。当時、廃墟派を中心とする韓国の知識人たちが、柳宗悦とその妻兼子の音楽会に如何に熱狂していたのかは、一九二一年一月『廃墟』に掲載された関苔原の小説「音楽会」に、次のように描かれている。

この東洋時報主催の音楽会は、至る所で話題になっていた。京城の知識階級、とりわけ青年の間では、多大な好奇心と喜びを持って迎える出来事だった。

この一年間、京城は政治運動にのみ没頭してきた。その結果、社会全体が激昂、憤怒、厭忌、不平、悲哀等といった重苦しい雰囲気覆われ、人々は無味乾燥な生活を送らざるを得なかった。従って、京城では音楽会のようなものは開かれることもなかったし、また聞くこともしなかった。また、たとえそのような事件（三・一独立運動、筆者註）がなかったとしても、没風景な京城では音楽会のようなものが開かれることはなかった。時たま教会主催の慈善音楽会が開かれることはあったが、それは素人の音楽会であって、音楽らしい音楽会は未だに行わなかった。

このような京城、このようにしか過ごすことのできない京城で、日本の音楽家を招いて東洋時報という新興新聞社の主催で音楽会を開くことになったのは、それ自体も珍しいことだが、音楽会という平和で愉快な言葉を聞くだけでも何とも形状しがたい気持ちを抑えられない<sup>81</sup>。（拙訳）

作者の関苔原は、柳兼子の独唱会を、三・一独立運動が失敗に終わり、無力感に打ちひしがれていたソウルの人々に希望を与える出来事として位置づけている。近代韓国文学における白樺派の影響を言及した金充植氏は、その

著『廉想渉研究』（ソウル大学出版部、一九八八年）の中で、出口の全く見えない植民都市ソウルに、白樺派の同人の一人である柳宗悦の朝鮮擁護論とその妻兼子の本格的で最初の近代西洋音楽会の開催は、自尊心の回復という異常な雰囲気を作り出したと指摘している<sup>82</sup>。また、柳の講演は、演題からも分かるように、そのほとんどが日本の同和政策に反対しているが故に、柳は危険な人物と目されるようになり、刑事に尾行される生活を余儀なくされていたのはよく知られ事実である。

以上のように、柳夫妻が足繁く朝鮮を訪れて行なっていた展覧会や講演会、音楽会は、三・一運動の失敗による挫折感に打ちひしがれていた朝鮮の知識人や若者に未来への希望を与えるとともに、自国の美を発見する契機を与えたという点においてもっと評価されてしかるべきだと思う。

## 六、もう一つの旅行記 — 結びに代えて

一九三六年、三七年、柳は日本民芸館の蔵品蒐集のために朝鮮を旅行し、その際「朝鮮の風物」（原題は「朝鮮の旅」一九三〇）と「全羅紀行」（一九三八）という旅行記を書き残している。一九二〇年、最初の旅行記「彼の朝鮮行」を上梓してからほぼ二〇年ぶりの旅行記である。二十年の歳月をへながら、この三つの旅行記には一貫したものが流れている。それはつまり、朝鮮の芸術とそれを生みだした朝鮮民族への限らない愛情と日本の朝鮮併合と同化政策に対する厳しい批判精神である。

すでに見てきたように、当時アジア大陸を旅行した日本人が書き残した旅行記の中には、いわゆる「劣ったアジアに対する優れた日本」を強調するものが多い。前でも述べたように、夏目漱石は一九〇九年九月から十月にかけて中国東北部と朝鮮を旅行し、「満韓ところぐ」（一九〇九）という紀行文を書き残している。ところが、漱石はこの作品の中で、中国人を「チャン」と見下し、中国人の不潔に対して不快感を露にし、しまいは汚い中国人と綺麗好きの日本人を強調して「日本人に生れました故幸福だ」と言っている。これは漱石のような人でさえも当時の時代状況からけっして自由で

なかったことを端的に示しているといえよう。

だが、柳宗悦は違っていた。柳の旅記には朝鮮及び東洋への限らない愛情がその底流に流れている。とりわけ、一九二〇年から一九三二年にかけて行っていた一連の展覧会や講演会、音楽会は、もう一つの「旅行記」として柳の朝鮮行を同時代の他の日本人の朝鮮行と一線を画すものとした。

もちろん柳も漱石同様時代の状況から決して自由ではなかった。朝鮮の美を、そのころの朝鮮史の争点となっていた停滞論と他律論の影響をうけて「悲哀の美」と理解し、韓国における柳批判の種を作ったりもした。しかし、柳は、一九一六年から一九四〇年までの二五年間、合計二十一回も朝鮮を旅することによって、見事にこの「悲哀の美」を克服することができた。これは当時、一、二回の朝鮮旅行を通じて朝鮮を理解したと開き直っていた旅行者とは極めて対照的な態度である。柳の朝鮮理解が同時代の日本の知識人と一線を画すこととなった背景には、このような二十一回に渡る朝鮮紀行が据えられているという事実を、私達は見逃してはならないであろう。

## 註

- 1、『東京朝日新聞』、一九一〇年、八月十日。
- 2、韓承美、「日本人の眼を通した朝鮮―明治後期の朝鮮旅行記の分析」『鏡の中の日本と韓国』小島康敬、M・W・スタイル篇、ペリカン社、二〇〇〇年）八一頁。
- 3、韓承美、前掲載（注2）七一頁。
- 4、山路愛山、「韓山紀行」（吉本隆明編『現代日本思想体系四 ナシヨナリズム』筑摩書房、一九六四年）五八頁。
- 5、韓承美、前掲載（注2）九二頁。
- 6、木村幹、「『不潔』と『恐れ』―文学者の見る日本人の韓国人イメージ」『近代日本のアジア観』ミネルヴァ書房、一九九九年）一一一頁。
- 7、浅川伯教は、一八八四年八月四日山梨県北巨摩郡甲村（現高根村）に生まれた。山梨師範学校を卒業の頃から、基督教とロダンの彫刻に関心の深かった伯教は、同校を卒業して付属小学校の教師となった。しかし、

『白樺』の愛読者であり、ロダンに傾倒して彫刻家になろうとした伯教は、小学校に関心を示さず、親友小宮山清三から見せられた朝鮮の美術工芸にひかれるあまり、朝鮮に渡る決心をし、一九一三年に朝鮮に渡った。南大門（後西大門）公立尋常小学校で教えるかたわら、李王家美術館に通った。伯教は、やがて東京にでて彫刻に専念し、帝展に朝鮮人像「木履の人」を出品して入選したが、再び朝鮮に帰り、朝鮮陶磁器の蒐集と研究に打ち込み、その研究成果は、伯教に「朝鮮陶磁の神様」という異名をあたえた。一九一四年、我孫子の柳宗悦を訪ねて以来、柳宗悦とは弟巧と共に生涯親交を結んだ。一九一六年の柳の朝鮮旅行は、伯教の勧めによるものであった。柳を釜山で迎えた伯教は、釜山はもとより、慶州、京城を案内し、柳の朝鮮とその芸術への開眼は、伯教の助けによるところが大きかった。（高崎宗司、「浅川伯教・巧兄弟と朝鮮」『三千里』一九八〇年夏号）

8、柳宗悦、「我孫子から―通信一」『柳宗悦全集』一卷、筑摩書房、一九八六年、以下全集とする）三三四頁。

9、浅川巧は、一八九一年、山梨県北巨摩郡甲村（現・高根村）に生まれた。県立農林学校を卒業後、東北で林業技術者として働いたのち、兄を慕って、一九一四年五月初めに渡った。巧は、朝鮮総督府農工商部山林課の林業試験場の雇員として勤務し、朝鮮の禿げ山の緑化に取り組み、目覚ましい成果をあげた。仕事で朝鮮各地の山々を歩く傍ら、朝鮮の民芸や李朝の陶磁に関心を持つようになった。一九一六年八月柳宗悦のはじめの朝鮮旅行に同行し、陶磁を見て回ったことをけいきに、巧は朝鮮の陶磁に強い関心を持つようになり、出張の機会を利用しては、朝鮮の美術・工芸品を蒐集・調査するようになった。『朝鮮の膳』（一九二九年）と『朝鮮当時名考』（一九三一年）はその研究の結果である。柳宗悦とは無二の友として「朝鮮民族美術館」の設立と設立後の運営・管理の實質的な責任者としてだけでなく、柳の「民芸運動」に大きな影響を与え、柳に朝鮮民芸研究への目を開かせた人でもある。植民地下の朝鮮に住みながら、他の日本人のように朝鮮民衆への差別というものがまったくな

かった巧は、朝鮮語を解するばかりでなく、食事や衣服、住まいにまで朝鮮の様式を取り入れるなどして、多くの朝鮮人に親しまれ、愛されたが、一九三一年急性肺炎で亡くなり、朝鮮の土となった。

10、柳宗悦、「年譜」(『全集二二巻下』二二八―二九七頁)。

水尾比呂志、「年譜」(『評伝 柳宗悦』(筑摩書房、平成四年)三四七―三五六頁)。

高崎宗司、「柳宗悦と朝鮮・関係年譜」(『朝鮮を想う』筑摩書房、一九八四年)二二七―二四六頁。

11、旗田巍、「日朝関係と歴史学」(『日朝関係史を考える』青木書店、一九九三年)によると、日本と韓国は、地理的にも歴史的にももともと関係の深い国であるにもかかわらず、現実には日本が韓国を見下げたり、または韓国が日本を認めようとしないうという見方がある。この見方に大きな役割を果たしたのが、戦前日本の歴史学者が作り出した朝鮮史像である。喜田貞吉らを中心に日本史の巨匠たちは、日本の朝鮮支配を成功させるために、積極的に朝鮮人に対する日本人の優越論を生み出した。その代表的なものが、「日鮮同祖論」「停滞論」「他律性論」である。

12、柳宗悦、「編集室にて」(『全集二〇巻』一八頁)。

13、柳宗悦、「今月の挿絵に就て」(『全集六巻』一六九―一七一頁)。

14、鶴見俊輔、「解説失われた転機」(『柳宗悦全集六巻』六七八―九頁)。

15、朴春日、「『韓国ブーム』の虚像と実像―近代日本報道・出版史の一断面」(『近代日本文学における朝鮮像』未来社、一九八二年)によると、日本の報道・出版界は、「征韓論」の台頭以来、朝鮮問題に強い関心を示した。そして、事件や戦争が起こるたびに異常な迄の反応を現わし、「日韓併合」を前後した時期と日中戦争から太平洋戦争に至る時期の二回に渡り、日本では「朝鮮ブーム」といわれるほどの異常な出版状況が生み出された。しかも、これらの「朝鮮ブーム」は、真の友好と連帯にもとづく「朝鮮ブーム」でなく、それはつねに軍国日本の対朝鮮政策の具体化として現れた。

16、旗田巍、前掲載(注11)十五―六頁。

17、三・一運動は、一九一九年三月一日を期してはじめられた朝鮮近代史上最大の反日独立運動である。第一次世界大戦以後、民族運動や革命運動が世界的な高まりを示したが、朝鮮でも独立を達成しようとする動きが一段と活発になった。一九一八年秋頃から、中国東北部やシベリア、アメリカ、上海など、海外で独立運動をしていた人々と、朝鮮国内で独立運動を行っていた人々の間に連絡がつけられ、一九一九年三月一日、ソウルのパゴダ公園に集まった学生・市民が、「民族代表三三人」が署名した「独立宣言書」を朗読して一斉に「独立万歳」を叫んでデモ行進を始め、これに多くの民衆が合流した。宗教界の重鎮や学生を中心に周到に準備されたこの運動は、平壤、義州、元山などで同時に発生し、やがて全国に広まっていった。当時二八郡のうち、何らの運動も発生しなかったのは、七郡だけだったといわれるほどの広まりを見せたこの運動は、基本的には非暴力の示威運動であった。しかし、総督府は軍隊を投入してこれを徹底弾圧し、一万近い死者と五万を超える逮捕者、そして二万の負傷者を出した。

18、柳宗悦、「朝鮮人を想ふ」(『全集六巻』二三―四頁)。

19、鶴見俊介、前掲載(注14)、六八六頁。

20、阿満利磨、「柳宗悦―美の菩薩」リポート、一九八七年)二一―二二頁。

21、高崎宗司、「柳宗悦と朝鮮―一九二〇年代を中心に―」(『朝鮮史叢』一九七九年六月)九三―九五頁。

22、前掲載(注10)に同じ。

23、柳宗悦、「彼の朝鮮行」(『全集六巻』六二―六三頁)。

24、柳宗悦、「失はれんとする一朝鮮建築のために」(『全集六巻』一五三頁)。

25、朝鮮語訳、『東亜日報』一九一九年四月十二号―四月十五日、十七日、十八日。

英語訳、『ジャパン・アドヴァイザー』一九一九年八月一九日。

26、柳宗悦、「朝鮮民族美術館設立に就いて」(『全集一卷』八〇頁)。

27、幼方直吉「日本人の朝鮮観―柳宗悦を通して」(『思想』一九六一年十月号)。

- 28、柳宗悦『朝鮮とその芸術』（柳宗悦選集四卷、一九七四、春秋社）三頁。
- 29、年譜、前掲載（注10）に同じ。
- 30、高崎宗司、「柳宗悦」（『韓国民芸の旅』草風館、二〇〇一年）七頁。
- 31、高崎宗司、「柳宗悦と朝鮮——一九二〇年代を中心に」（『朝鮮史叢』一九七九年六月）八一頁。
- 32、金充植（『廉想渉研究』ソウル大学出版部、一九八八）九〇頁。
- 33、金充植、前掲載（注32）に同じ。
- 34、関荅原、「音楽会」（『廢墟』一九二〇年）一一五、一一六頁。

（二〇〇二年十月三十日受理）

## 또 하나의 여행기 - 야나기 무네요시의 조선기행을 중심으로

정 귀련

러일전쟁이후 일본정부는 청소년들에게 새로이 획득한 영토(아시아대륙)에 여행할 것을 열심히 장려하고 지원했다. 그 결과 1905년에서 1920년 사이에 아시아대륙을 여행하는 사람이 급증했을 뿐만 아니라 여행체험을 기록한 여행기가 다수 출판되었다. 가쓰라기 덴카의 「조선반도호걸적 여행」 1905, 도리이 류조의 「南滿기행」 1905, 시라토리 고기치의 「조선여행담」 1905, 야마지 아이잔의 「韓山기행」 1905, 니도베 이나조의 「枯死國 조선」 1906, 나츠메 소세키의 「滿韓의 이모저모」 1909, 다카하마 교시의 「[조선]」 1912, 다니자키 준이치로의 「조선잡감」 1919, 다야마 가타이의 「滿鮮행락」 1923 등은 대표적인 조선여행담이다.

일본을 대표하는 역사가·문학가·저널리스트·학자들이 집필한 이들 여행기의 특징은 낙후하고 뒤떨어진 아시아에 대한 발전되고 뛰어난 일본·일본인이 강조되어 있다. 그런데 같은 시기에 조선과 중국 만주를 여행한 민예연구자인 야나기 무네요시는 전혀 다른 여행기를 남기고 있다. 1920년에 집필한 「그의 조선행」은 다른 여행기에 보이는 조선민족에 대한 우월감은 그림자도 보이지 않고 식민지 조선의 예술과 그것들을 만든 조선사람들에 대한 외경심으로 가득차 있다.

본고는 야나기 무네요시의 21회에 걸친 조선여행을 추적하면서 야나기가 어떻게 메이지기 일본에 있어서의 일반적인 조선 및 조선인 이미지로부터 벗어 나갔는가를 고찰하였다.